

三浦市立南下浦中学校

研究テーマ：教師の個別最適な学びとしての探究的な研究 ～協働的な学びとともに～

1 実践の目的

(1)実践の背景

令和3年に示された『令和の日本型学校教育を担う新たな教師の学びの姿の実現に向けて（審議まとめ）』（令和3年11月15日、中央教育審議会、以下「審議まとめ」）では、「令和の日本型学校教育」を担う新たな教師について次のように述べられている。（引用部分における下線はすべて筆者が付したものである。）

「Society5.0時代」が到来しつつあるなど、大きな変化が生じている中で、教師が、時代の変化に対応して求められる資質能力を身に付けるためには、養成段階で身に付けた知識技能だけで教職生涯を過ごすのではなく、求められる知識技能が変わっていくことを意識して、教師が常に最新の知識技能を学び続けていくことがより必要となってきた。

このことから、これからは、教師自身が時代の変化に応じた資質・能力を身に付けることが求められており、そのためには教師自身が学び続けていく必要があると考える。

では、教師はどのように学んでいけばよいのだろうか。「審議まとめ」では、教師の学びについて次のように述べられている。

教師自身が、新たな領域の専門性を身に付けるなど、全教員に共通に求められる基本的な知識技能というレベルを超

えて強みを伸ばすことが必要であるが、教師の学びに充当できる時間が限られている中であって、こうした強みを伸ばすための学びは、およそ教師として共通に求められる内容を一律に修得させるというものではなく、より高度な水準のものも含め、一人一人の教師の個性に即した、個別最適な学びであることが必然的に求められる。

つまり、校内外での研修だけではなく、教師一人ひとりが課題や興味・関心に応じて学んでいく教師の個別最適な学びが必要であると考え。

(2)今年度の研究

前年度、前述の背景を踏まえ、教員一人ひとりが自らの課題や興味・関心に応じてテーマを設定し研究に取り組む「ひとり一研究」を校内研究として取り組んだ。前年度の成果として以下3点が挙げられる。1点目は、講師を招いての研修を行ったことで、教員はより主体的に、校内研究を自分事として捉えることができたことだ。2点目は、一人ひとりが個別最適な学びに向かい、それぞれの研究テーマを決定し、研究計画を立て、実践することができたことだ。そして3点目は、自ら主体的に学ぶ力が向上したということが挙げられる。課題としては、グループに分けたことで個別最適な学びと協働的な学びを両立することはできたが、お互いの実践を参観し合うことが不十分であった点が挙げられる。今後は、協働的な学びの

充実が求められた。

そこで今年度は、それぞれが自身の研究テーマに関わる授業を行うことを全教員に周知し、同じグループのメンバーを中心に互いに授業を参観し合うこととした。

2 実践の内容

(1) 教員一人ひとりの興味・関心や課題意識の明確化

4月から5月にかけて、全教員にテーマ設定やグループ分けに向けたアンケートを実施した。昨年度の自身の研究テーマをさらに深化させたテーマを設定する教員もいれば、自身の新たな課題意識や興味関心に応じて研究テーマを変更した教員もあり、その在り方は多様であった。(表1にその一部を示す。)

教科	研究テーマ	仮説
数学	生徒の興味関心が持続できる指導法の模索	個々にあった指導法の幅がひろがれば、持続的な興味関心が生まれるだろう。
技術科	効率的に、計画的に製作実習を行わせるために必要な手立て。	作業内容をデータで与え、全ての行程をいつでも確認できるようにすれば、自分で作業を選択することができ計画的に作業を進めていく姿勢が身につくだろう。
社会	思考力を高める授業の実践	考える行動をすれば、考えが深まるだろう。考える機会を増やせば思考の深まりが増すだろう。学習内容の見直し・予測と振り返りを積み重ねれば、思考の視野が広がるだろう。
体育	「誰もが楽しめ、主体的に活動できる体育の授業」 ・特に苦手意識の出やすい球技を中心に 行う	①(発達段階に応じた練習や試合を)すれば、(みんなが参加しやすい)だろう。②(自分たちでルールづくりを)すれば、(ルールを理解して積極的にゲームに参加できる)だろう。

(表1)

(2) グループ編成

5月下旬に研究推進委員会を開き、今年度のグループ編成を行った。今年度は、グループ数を前年度の4グループよりさらに分けて5グループとし、1グループの人数を4～5名と少なくすることで、グループのメンバーが互いに授業を参観しやすい環境とした。

また、グループのリーダーは研究推進委員を中心とし、年間を通してグループで研究に取り組むこととした。

(3) よりよい研究を目指していくため、「授業の見方」の幅を広げ、「授業を見る目」

の向上を目指す取組

校内研究を充実させるうえでも、授業改善を行ううえでも、「授業の見方」「授業を見る目」を鍛えることは有効であると考え。そこで、今年度は1学期に全教員で一つの授業を参観(図1)し、「授業の見方」について、若手・中堅・ベテラン教員が混在して協議をする研修会(図2)を設定した。

本授業には、講師として、昨年度から本校の校内研究に関わっていただいている千葉大学非常勤講師古谷先生、神奈川県教育委員会子ども教育支援課指導主事、ならびに教育課程実践検証協力校事業に関連して文部科学省の鈴木教科調査官を招聘し、授業の指導内容等のみならず、「授業の見方」についても指導助言をいただいた。



(図1 授業参観の様子)



(図2 協議の様子)

授業後に、先生方へアンケートを実施した。次の図3は、アンケート結果の一部であ

る。

<p>授業を参観する視点というのは、自分の中でも課題とする部分でした。授業参観後にたくさん意見交換ができたことも自分の大きな収穫でした。</p> <p>全員で一つの授業を見せていただくというのもよいものだなと思いました。たくさん先生の公開授業をする機会と、年間を通じて中で両立できるとよいと思います。様々な先生方が授業について考え話し合う場合は、やはりとても勉強になるところが多いと感じました。</p> <p>全員で同じ授業を見て、共通の話ができたのが良かったと思います。今回、グループ内で授業を見合うということなので話しやすいと思います。</p> <p>3人でグループ討議をしたときに、視点の違いが明確になった。子どもの視点やつぶやきから臨む人、指導案の評価基準や目標から見ると、授業の流れや構成から見学する人など違いが見られた。</p> <p>他の先生の授業を実際に見て、同じ資料を使ってみんなで話し合うことはすごく大事だと改めて感じました。一人で見ていると気づけなかったことも、グループで意見を出し合うことで「そういう見方もあるんだ」と発見が広がりました。今回の話し合いで出た気づきや学びを、これからにしっかりつなげていきたいです。</p> <p>今回の校内研究会を経て、「授業を見る」ときにはどこに注目すべきか、また、自分自身が普段授業を見るときに、どこに注目しているかを振り返ることができた。他教科の授業を見て、良いと思った手法を担当教科と結び付けて、取り入れられるように今後の授業を考えていきたいと思いました。</p>

(図3 先生方へのアンケート結果)

(4)実践に向けた研修会

8月に、研究テーマの決定と実践に向けた校内研究全体会、及びグループ協議を行った。7月までに仮決定したそれぞれのテーマを事前に研究協力者である古谷先生にお送りし、全体会で古谷先生から、一人ひとりの研究テーマや研究の進め方について助言をいただいた。その後のグループ協議では、それぞれが実践を行ううえで重点を置いていることや意識していること、実践を進めるうえでの不安な点や疑問点などを話し合い、2学期から行う実践に向けた準備を行った。

(5)それぞれの実践

2学期はそれぞれの実践期間と位置づけ、取り組んだ。各教員が授業実践を行う日程の計画を立て、管理職に伝える。そして、管理職から職員室の黒板を使って全職員に周知する形を取った。また、グループ内のメンバーには個別に声を掛け合い、授業を参観しやすい環境を作った。

加えて、今年度は11月に2名の教員が個人の研究テーマの公開授業を行い、それを全教員で参観する機会も設けた。これは、6月に交流した「授業の見方」を実践するとともに、より多くの人に見てもらうことで

個人研究の充実を図るためである(図4)。



(図4 授業の様子)

3 実践の成果と課題

成果として、昨年度の反省にあがった協働的な学びをより充実することができたことが挙げられる。具体的には、グループ内での授業の参観が行えたこと、「授業の見方」「授業を見る目」を鍛える機会を設け、それを参観するときに活かすことができたことである。管理職が積極的に授業を参観、指導したことも校内研究の充実につながった。

課題としては、授業を必ずしもグループ全員で参観できなかったことが挙げられる。より多くの人に見てもらうことで、個人研究の価値や課題がより明確になると考える。

4 今後の展開

「ひとり一研究」は、教員が主体的に校内研究を行うことにつながり、自身の力を伸ばすことにもつながりやすい。次年度も、個々人の課題や興味・関心に応じた「ひとり一研究」を継続したいと考える。

次年度は、より多くの教員が互いに授業を参観できるよう朝の打合せで全体周知をし、協働的な学びの活性化に取り組みたい。